はしがき

本研究の組織、成果の概要は以下の通りである

研究組織

研究代表者：　越智博美　（一橋大学　大学院商学研究科　教授）
研究分担者：　吉川純子　（武蔵大学　人文学部欧米文化学科　教授）
研究分担者：　三浦玲一　（一橋大学　大学院言語社会研究科　准教授）

交付決定額（配分額）

	直接経費	間接経費	合計
平成 18 年度	1400 千円		1400 千円
平成 19 年度	900 千円		900 千円
総計	2,300 千円		2,300 千円

研究発表

(1)学会誌等

1.Hiromi Ochi, ”What Did She Read? : The Cultural Occupation of Post-War Japan and Translated Girls’ Literature” COE F-GENS Journal Vol.5（お茶の水女子大学 2006), 359-363.

2.越智博美、「新批評の父たち-南部農本主義者の共同体」『一橋大学研究年報 人文科学研究』43（一橋大学 2006)、189-249頁

3. 越智博美、「南部文学の遠い部屋」、『英語青年』(研究社　2006年12月号）、514-517頁

4. 越智博美ジュディス・バトラー、『ジェンダーをほどく』第 2章「ジェンダーを規制するもの」『述』第2号（2008年7月）146-168

(2)口頭発表

1.越智博美、「モダニズムの南部的瞬間」（日本アメリカ文学会全国大会、10.14.2006、法政大学)

2. 越智博美、「キャノンの南部化―モダニズムと南部農本主義」（日本アメリカ文学会

東京支部、2007年3月17日、慶応大学)

3. Hiromi Ochi, Transformation of the Meaning of Retirement in Terms of Neo-Liberalist Discourse (Oceanic Popular Culture Association, 2008年5月23日、Chaminade University, Honolulu, Hawaii)

4. Reiichi Miura, "On Singularity and Postmodern Pluralism" (The Summer Institute on Culture and Society 2007年6月22日University of Illinois at Chicago) by Marxist Literary Group of MLA

5. 三浦玲一、ミニ・シンポジウム「村上春樹訳『グレート・ギャツビー』を読む」司会及び講師　(日本フィッツジェラルド協会、2007年10月13日、広島経済大学)

6. 三浦玲一、「*The Great Gatsby*をいま読む―モダニズム、アイデンティティ、権力」(日本アメリカ文学会東京支部、2008 年1月28日、慶応義塾大学)

7.三浦玲一、「なぜギャッツビーは男性化粧品の名前なのか？―モダニズム、6. アイデンティティ、ブランド」シンポジウム「資本主義とアメリカ文学」講師（日本英文学会全国大会、2008年5月25日、広島大学)

(3)出版物

1.越智博美、「戦後少女の本棚」竹村和子編『ジェンダー研究のフロンティア　第5巻欲望・暴力のレジーム揺らぐ表象／格闘する理論』(作品社 2008)、86-102頁

2. Hiromi Ochi, "Democratic Bookshelf: American Libraries in Occupied Japan" Catherine Turner ed, .*Print Culture in the Cold War* (University of Massachusetts Press) 所収予定

3. 越智博美、大橋洋一編著、『現代批評理論のすべて』(新書館 2006)
「新批評」、「冷戦時代の文学」など複数項目執筆担当

4.三浦玲一、大橋洋一編著、『現代批評理論のすべて』(新書館 2006)「クィア批評」など複数項目執筆担当

本報告書は、平成 18 年度から 19 年度にわたって交付を受けた科学研究費基盤研究（C）の成果である。研究代表者と分担者は、アメリカ文学、アメリカ文化の研究を、とくにモダニズムや冷戦期を中心に研究してきた。本研究はその中でも、歴史的、文化的な構築物としてのモダニズムを、国家言説、冷戦の政治言説、ジェンダー・セクシュアリティ言説の相互干渉性の視点から再考し、それらの言説の関係性からモダニズムのキヤノン性の構築過程の再考を目指すものである。

本報告書は以下のような構成を取る。まず I において、18 年度の研究経過および業績、II において 19 年度の活動報告および業績、III において総括および今後の研究の展望について述べる。

最後になるが、このような課題の研究を常に支え、後押ししてくれる研究支援課の方々、一橋大学大学院商学研究科の方々、わけても煩瑣な書類手続きに変わらぬ目配りをくださった商学研究科担当事務官の小林由郷氏に心からの感謝を申し述べたい。